

研究発表会実施概要

- 1 日 時 平成19年9月19日(水) 15時～
- 2 場 所 関西大学100周年記念会館 第2会議室
- 3 研究発表(15:00～16:00)
 - (1) 守如子 社会学部専任講師
発表テーマ「マンガとジェンダー—マンガ表現論の視点から—」
 - (2) 江川直樹 環境都市工学部教授
発表テーマ「タウンスケープをつくる団地再生
—親空性と親街路性の視点から—」
- 4 大学側出席者
大津留智恵子学長補佐 他

以 上

マンガとジェンダー

— マンガ表現論の視点から —

社会学部マス・コミュニケーション学専攻
守 如子 (MORI Naoko)

【概要】

マンガ学・マンガ批評において、一足とびに「マンガは何を描いているのか」と主題の分析を行ってしまうのではなく、「マンガはどのように表現しているのか」という「マンガ表現論」的視座から論じることの重要性が言われてきた。一昨年には『テヅカ・イズ・デッド—ひらかれたマンガ表現論へ』（伊藤剛）や『マンガ表現学入門』（竹内オサム）が出版され、マンガ表現論に一段と注目が集まっている。

本報告では、「女性向けストーリーマンガ（少女マンガなど）」と「男性向けストーリーマンガ（少年マンガなど）」にみられる差異に着目することで、マンガ表現論がもつ可能性について論じたい。

その一つが、それぞれのジャンルに特徴的にみられる表現技法が、マンガの主題にある傾向を生み出しているという点である。マーシャル・マクルーハンの「メディアはメッセージである」という言葉にもあるように、メディアの特性は、伝達する内容を規定する側面をもつ。女性向けマンガの表現技法と男性向けマンガの表現技法が両者の主題にどのような違いをもたらしているのかを明らかにする。

第二に、表現技法の差異は、マンガの内容だけではなく、そのほかさまざまな側面に異なる影響を生み出しているという点である。女性向けマンガには月刊誌が多く、男性向けマンガには週刊誌が多いこと、電車などの公共の場では男性向けマンガ雑誌を読む姿が多く、女性向けマンガ雑誌を読む姿がほとんどみられないこと…。このような差異を表現技法の側面から論じていきたい。

【プロフィール】

1972年北海道生まれ。北海道大学文学部哲学科卒業、お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士課程修了(社会科学博士)。2007年より関西大学社会学部専任講師。専門分野は、ジェンダーとセクシュアリティの社会学。フェミニズム理論や、ゲイ&レズビアン・スタディーズ、メディア研究などの知見をもとに、性や親子関係が女性向け／男性向けマンガの中でどのように表象され、読者に解釈されてきたのかについて実証的な研究を進めている。共著に『これからの家族関係学』『変わりゆく社会と人権』『ジェンダーと社会理論』『腐女子マンガ大系（ユリイカ臨時増刊号）』。

タウンスケープをつくる団地再生 - 親空性と親街路性の視点から -

江川直樹 / 建築家・関西大学環境都市工学部建築学科教授

1. 団地からマチへ / 団地の再生は現代日本の抱える大きな課題の1つ。建築としての改善だけでなく、マチとしての再生という視点が重要。団地とは、一種のユートピア的発想で、周辺の市街地との連続性がなく、閉じた環境を形成しており、熟成ではなく、衰退、荒廃傾向が強い。住戸の改善と併せて、良好で持続力のある住宅市街地への改善が求められる。

2. 団地から街区へ / 「団地」ではなく、「街区」という市街地を形成する敷地単位で考える視点が重要。適正に配置された公共の街路によって囲まれ、人間の生活スケールに即して適度に分節された敷地単位。この街区という敷地単位に対し、建築（住宅）がどのように配置され、「マチ」が形成されていくかが重要な視点。いかにして住宅でマチをつくっていくのか。

3. タウンスケープ / 建ち並ぶ家々で作られる都市景観、まちなみ景観。見かけの表層の様相ではなく、人々の生活の背後に潜む本質が表出した結果の、生活そのものの総体的な風景。生活の舞台となる環境の骨格性が重要。建ち並ぶ家々が協調して創り出す環境の骨格性は、それぞれの建築（住宅、集合住宅）がどのようにマチとつきあいながら建っているのかということに拠る。

4. 「親街路性」 / 建ち並ぶ家々が、いかに街路、道路空間と親しめる関係性を持ちうるか、という視点。閉鎖的過ぎても、オープン過ぎてもだめ。壁面後退の公開空地より・・・。「人気＝ひとけ」の感じられる市街地の道路空間、まちなみ空間を、集住空間のデザインとしてつくっていくことが重要。安心安全な住環境もここから生まれる。

5. 「親空性」 / いかに空とつきあう生活環境を形成するかという視点。結果として、空とつきあう都市景観が形成される。屋根並みの視点。魅力的な都市や集落には、美しいリズムや適切なプロポーションによる変化ある屋根並みが存在していた。一律な高さ規制ではない、場所特性に応じた空との付き合い方が必要。高密度になればなる程、空が広く感じられることが重要。

6. 浜甲子園さくら街（建て替え1期） / 2006年度関西まちづくり賞受賞作にみる、親空性と親街路性の視点。高齢者も若者も、共存して持続的に住み続けるための団地再生事例（旧住宅公団団地の再生）。広く青い浜甲子園の空を感じる「親空性」と、低層の住宅を近づけるといふ発想によって安心安全な住宅地環境をつくりだす「親街路性」の提案。

<プロフィール>

江川直樹

早稲田大学理工学部建築学科卒業、同大学院修士課程修了。1977年（株）現代計画研究所入社、83年同大阪事務所を開設し、集住環境を中心とする建築設計と都市デザインに取り組む。スラム化した公営住宅団地の建て替えを住民参加型で行い、南廊下のある立体集落型の住環境を実現した「御坊市宮島団地再生」で2001年度日本都市計画学会賞受賞（計画設計賞）、00年度和歌山県ふるさと建築景観賞、99年度関西まちづくり賞を受賞。その他数多くの受賞歴がある。立命館大学、神戸芸術工科大学、京都造形芸術大学、大阪市立大学、三重大学で非常勤講師を務め、04年本学に教授として着任。着任後も、06年度都市住宅学会賞（業績賞）、06年度都市住宅学会賞（著作賞）、06年度地域住宅計画賞、06年度関西まちづくり賞等を受賞。